美術の窓(87)

興福寺北円堂の無著・世親像

大和文華館館長　水田　徹

世親像左側面　世親像正面　無著像正面　無著像左側面

本誌の一昨年夏号(139号)で東大寺三月堂の「伝日光・月光菩薩立像」を取り上げ、両像の間に年齢差を視野に入れた対比の妙が認められると推論しました。引き続き今回は興福寺北円堂の「無著・世親像」に観察を進めてみましょう。

ご案内のように興福寺北円堂は春と秋に特別開扉され、国宝「無著・世親像」を間近に拝観できます。昨年は「東大寺のすべて」展で「伝日光・月光菩薩立像」の観察に終始し、北円堂の方は八角堂の森厳たる偉容を垣間見るだけでしたが、今秋はいよいよ堂内に歩を進め、中尊弥勒仏像の両脇に立つ「無著・世親像」を間近に見上げることができました。両像が作り出す量感と彫刻空間は圧倒的であり、かつ厳しくも滋味あふれる尊顔は誠に有り難く、筆舌に尽くしがたいものがあります。

が、それとは別に、八角の土間を幾度も巡るにつれ、無著像と世親像の間に密かな、しかし確たる対比の原則が貫かれ、かつその基本構造は「伝日光・月光菩薩立像」のそれに通じるところが多々あるように思えて参りました。以下この点について、私の観察経過をご紹介しましょう。

まず無著・世親像の立ちポーズですが、両像とも顔を軽く内側(中尊側)に回し体躯を正面向きに佇立しており、一見同態のように見えます。しかし側面観では無著像が直立態であるのに対し、世親像は体躯全体をやや前傾させており、同様の対比は先の号で観察したように伝日光・月光両菩薩立像の間にも認められました。

この姿勢の違いが腕の構えの違いに由来している点でも両群像は共通しています。これも側面観ではっきりするのですが、無著は両腕を胸元近くに構え、世親は両腕をやや前方に出しています。そのことは今は失われている世親の持ち物を、無著のそれとほぼ同寸法のものとして掌の上に推定復原してみると、それが胸から離れて位置することによっても明らかです。モチーフこそ違え、月光像が合掌した手を胸元に構え、日光像が手先をやや前傾させていたのと全く同じ構造と申せましょう。

腕の構えの違いは衣の表現にも反映します。背中を走る袈裟と大衣の輪郭も、両腕から垂下する袈裟の襞も、側面観において無著ではほぼ垂直に、世親では明らかに斜め上向き、つまり差し出した腕に向って走っています。

伝日光・月光菩薩像の方は衣装が異なっているため正確な比較は困難ですが、総じて正面・背面・側面の三観とも、直立態の月光像では垂直の衣文が主体となり、前傾姿勢の日光像では明らかに斜め上方に流れる衣文線が強調されており、基本構造は無著・世親像と一致します。

むろん無著・世親像は写実が一段と進み、体躯の量感とともに衣も厚みと重量感を増し、細部表現においても観察が一層精緻になっています。例えば手首に懸かる衣の縁のさばき方は、無著では縁が折り返されているのに、世親では折り返しがありません。胸元に引きつけたが故に手首に衣がたわみ、一方、一重の縁は腕の前方への動きに見事に呼応しています。

正面観で袈裟の裾が無著では水平に走り、世親では向かって右上がりに傾斜しているのも、背面観で世親の袈裟の裾が無著とは違い大きく山型に吊り上っているのも、腕の動きを周到に計算した一連の衣文処理と申せましょう。

頭部の造りも腕の構え、ひいては姿勢の違いに見事に照応しています。正面観での耳の見え方の違いが示すように、世親の方がより強く首を回し、かつ眼差しは眉間に皺を寄せ気味に水平やや彼方に焦点を合わせ、一方無著は眉を谷型に反らせ眼差しを前方やや下方に落としています。首の左右へのひねりを除けば、直立態の像は下目遣い、前傾態には前方直視型という、伝日光・月光両菩薩像における姿勢と眼差しの対応関係がそっくりそのまま無著・世親像に適用されているのです。

翻って我々は先の号で、伝日光・月光菩薩両像の間の眼差しの違いを最終的には日光像をやや若作り、月光像をより内省的な壮年風に見せている、と解釈しました。周知のように無著と世親も、紀元4世紀のインドで法相宗の教えを確立した兄弟僧であったといいます。ともに宝物を奉じつつ、片や立ち止まって自らの内に沈思し、片や他者に語りかけ、あるいは問いただすかのように身を迫り出し、意志を込めて首を振り向ける。そんな対比を我々は兄と弟の像の間に読み取ることが出来るのではないでしょうか。

年齢差による思惟・思考のあり方の違いを、伝日光・月光菩薩立像の場合と全く同じ対比の方程式を用いつつ、首にひねりも加え一層入念かつ見事に、一対の彫刻の中に結実させたもの、それが「無著・世親像」ではないでしょうか。

作者はむろん巨匠運慶。彼は奈良天平の古典彫刻の伝統の上に自らの鎌倉彫刻を大成させたといわれます。三月堂の「伝日光・月光菩薩立像」との比較を試みるにつけ、運慶の古典学習はまこと詳細かつ徹底したものであったと思われてなりません。

季刊 美のたより №145
平成16年1月6日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.